



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.5

なぜ、歴史を学ぶのだろうか？

歴史学習は生命の連続性を学ぶ場面

歴史を、なぜ学ぶのでしょうか。昔の出来事を学んで何の役に立つのでしょうか。どのように学べば良いのでしょうか。歴史を学ぶ前に少し考えておきましょう。

まず初めに、歴史は、人類の生命が幾多の困難を乗り越えて伝えられてきたこと、文化も様々な失敗を経験して高めてこられたことを教えてくれます。言わば、現代の私たちの生命や暮らしと、昔の出来事との関係や連続性を学ぶ場面なのです。

私たち人間の祖先は、サルの仲間だったと言われています。裸のサルがどうすれば、生き抜いて子孫を残すことができたのでしょうか。少し考えてみましょう。

もし、あなたの祖先が子孫を残す前に死んでいたら、あなたの生命は、今あるでしょうか。あなたは、私たちの祖先がどのように生き延びて、私たちに生命をつないでくれたのかを知りたくはありませんか。自分の生命は、歴史的につながれてきた確かな存在なのです。ここに歴史を学ぶ1つ目の意味があると私(倉橋)は思います。

そして、私たちが暮らす現代社会では、様々な問題が起こります。人が生きていく上で、問題に出会わない人生はないと言っても良いと思います。その社会問題や人生で出会う問題をどのように解決すれば、よりよい社会にすることができるのか、より自分らしく生きることができるのかを考えることが社会科学習の目標です。

人類の誕生から今日までの道のりは決して楽なものではありませんでした。私たちの祖先は、何万年も厳しい時代を生き延びてきました。苦難の末に祖先がつかんだ知恵を正しく学び、自分の人生や生き方に活かしたい、それが歴史を学ぶ意味の2つ目です。さらに、私たちはその知恵を次代にどのようにつなぐことができるのかを考え行動したい、それが歴史を学ぶ意味の3つ目です。



歴史は社会科学の実験箱

4つ目は、歴史は社会科学の実験箱だと言っておきましょう。

例えば、病気になったときに、薬を飲めば治るのか、手術をすれば治るのか、私たちは判断に迫られます。素人の私たちは病院に行くかどうかを判断するだけです。け

れども、医者は何を基準に判断しているのでしょうか。医学のような理科学的な科学では、動物実験だけでなく様々な実験をすることができます。そして最善の治療法は、過去の症例や、実験結果に基づいて導き出されます。医者は、その研究成果を活用しているのです。しかし、人間の住む社会を直接的に実験対象とすることはできません。そこで、社会問題の解決方法を探る方法として、歴史から学ぶことが研究されてきました。だから、歴史は社会科学の実験箱だと言われます。



歴史学習を深めるための「10」の視点 7w3h

次に、歴史学習を深めるための視点(7w 3h)を説明しておきます。

歴史を学ぶ際に大切な第1の視点は、いつ**when**、どこで**where**、どんなことがあったのか**what**、それは誰が**who**、どのようにして行ったのか**how**を正確に知ることです。これらは比較的見えやすい歴史上の出来事の一部で、たいていの場合、教科書などを読めば書かれています。新聞などもこれらの情報で成り立っています。

第2の視点は、なぜ、その出来事が起きたのか**why**、その原因になったことは何なのか、その出来事の結果どんなふうになったのかを考えることです。つまり、出来事と出来事との因果関係を探ることを学習テーマにすることです。この場面では、資料を基に自分で推理することが大切になります(歴史学の重要な研究テーマです)。

第3の視点は、誰にしたのかということですが**whom**。小学校では誰がしたのか**who**を中心に歴史学習をしてきました。しかし、固有名詞の分からない多くの人達の存在があつて社会は成り立ちます。たとえば、大阪城は誰が建てたのでしょうか。たいていの人は、豊臣秀吉と答えるでしょう。でも、正確には、豊臣秀吉は建てさせた人で、実際に建てたのは大工の棟梁であり、技術を持つ職人たちなどの多くの人達です。そのように考えると、血のにじむような過酷な労働と汗の結晶としての大阪城が見えてきます。そのように、有名な個人だけではなく、その時代の社会を支えた人々に目を向けて考えると、人々の暮らしと社会の関係を歴史から学ぶことができます。

第4の視点として、どれ位のコスト**How much**、つまり費用とか時間や資源をどれ位使ったのかが重要な視点です。このかけたコストを調べると、当時の様子がよく分かります。さらに、それがどの位の規模の物だったのか**How many**を知ると、コストと結果を数量的に把握することが可能になります。これが第5の視点です。

第6の視点は、その時代の人の立場に立って、どんな解決策があるのか「自分ならどうするか」考えることです**which**。これは主体的な学習経験の一場面です。歴史上の人達の経験を主体的に学ぶことが、学ぶ楽しさを倍増させてくれるでしょう。